

富山県富山市

任海宮田遺跡発掘調査報告書 III

1998年3月

富山県埋蔵文化財センター

序

当センターでは、国際健康プラザ整備事業に先立ち、任海宮田遺跡の発掘調査を平成7年度から実施してまいりました。今回の発掘調査をもちまして同プラザ整備事業に先立つ調査は終了いたしました。

平成7・8年度の調査では、古代と中世を中心とした遺構や遺物が数多く発見されました。古代の遺構としては、竪穴住居群、掘立柱建物群や格子状の壇、遺物としては石帶の発見が注目されます。中世の遺構としては、溝により区切られた掘立柱建物群がありますが、中でも竪穴土坑と井戸を取り込む掘立柱建物が注目されます。

今回の調査は、約600m²という狭い調査面積でしたが、古代の溝とそこに廃棄したと考えられる須恵器の大甕、中世の掘立柱建物とそれに伴う土坑など遺構の集中が見られました。

これまでの調査結果を併せまして、本書が多くの方々に活用され、古代や中世の研究の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたり御協力いただきました関係各位や各機関に対し厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

富山県埋蔵文化財センター

所長 岸本 雅敏

例　　言

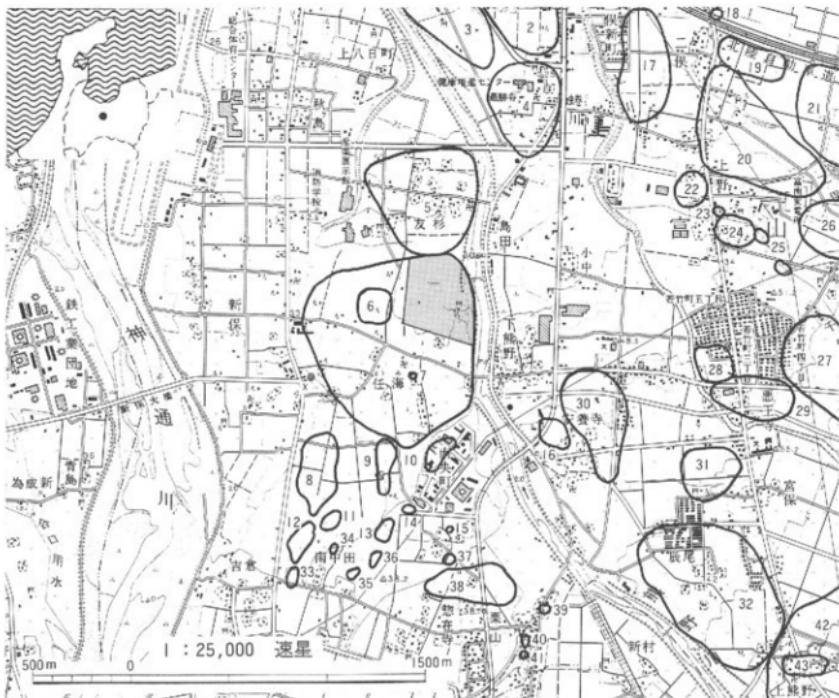
- 1 本書は、富山市友杉・任海地内に所在する任海宮田遺跡（遺跡番号201501）の東端部にあたる地区的発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の調査は、「国際健康プラザ（仮称）」の整備に伴う緊急発掘調査であり、富山県厚生部国際健康プラザ建設室の依頼により、富山県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本発掘調査の期間・面積・調査担当者は以下のとおりである。
調査期間：平成9年5月12日～同年6月19日
調査面積：607m²
調査担当者：神保孝造（富山県埋蔵文化財センター 調査課主任）・境 洋子（同 文化財保護主事）
- 4 本発掘調査及び本書に用いた遺跡の略号は「TTM」で、さらに各地区的表現は、たとえばA地区の場合「TTM-A」として表すこととした。遺物への注記もすべてこの表記で行なった。
- 5 遺構に関しては、各遺構種別ごとに通し番号を付した。使用した記号が表す遺構は、以下のとおりである。
S B：掘立柱建物 S D：溝状遺構 S E：井戸 S I：竪穴住居 S K：土坑 P：柱穴
- 6 土層の色名については、小山正忠・竹原秀雄 編・著『新版標準土色帖』（1995年版）に基づき、現地で色層・明度・彩度を記録した。
- 7 遺構実測図にある方位は真北を示し、数字は海拔の高さを表す。
- 8 写真図版の内、遺物写真の縮尺は、特に記載のないものに関しては1/3である。
- 9 本書は、当センター所員の助言を得、境が執筆した。

目　　次

序	IV 遺物	10
例　　言	1 古代の遺物	10
	2 中世の遺物	11
I 位置と環境	V まとめ	16
II 調査の概要	1 はじめに	16
1 調査に至る経緯	2 層序	16
2 調査地区的区割	3 古代と中世の建物遺構の立地	17
3 層序	4 まとめ	20
III 遺構	参考文献	21
1 古代の遺構	報告書抄録	22
2 中世の遺構	写真図版	
3 近・現代の遺構		

I 位置と環境

任海宮田遺跡は、富山市任海・友杉に所在する遺跡であり、その広がりは、南北に約1km東西に約900mにも及ぶ。同地は富山市南部の神通川と熊野川が合流する地点の南方約4kmに位置し、これらの河川により形成された複合扇状地上に立地する。現標高は、30m～35mである。2つの河川に挟まれるという立地環境から、度重なる水害にみまわれた歴史をもつ。近代に入ってからは、大正3年（1914年）の8月に神通川・井田川・山田川・熊野川が未曾有の大出水をし、周辺に大被害をもたらした。これらの度重なる水害は遺跡にも影響を及ぼしており、平成7・8年度に行なった調査ではB地区・C（CN）地区・K地区において氾濫の痕跡を認められ、特にB地区においては、平安時代の堅穴住居・鎌倉時代の掘立柱建物が氾濫により破壊されていることを確認した。のことから、古代・中世の居



遺跡名
 1 任海宮田遺跡 2 黒崎種田遺跡 3 八日町遺跡 4 勝川館跡 5 友杉遺跡 6 任海池原寺跡 7 任海三十石塚 8 吉倉B遺跡 9 任海遺跡 10 任海遺跡 11 任海鎌倉遺跡 12 南中田D遺跡 13 山葉原遺跡 14 任海砂田遺跡 15 山葉A遺跡 16 安養寺遺跡 17 上野井田遺跡 18 二俣寺跡 19 二俣北遺跡 20 二俣遺跡 21 石田北遺跡 22 上野鍋田遺跡 23 上野遺跡 24 上野電車遺跡 25 上野遺跡 26 石田遺跡 27 吉岡遺跡 28 恵王寺遺跡 29 竹町遺跡 30 下野野原遺跡 31 宮保遺跡 32 尾張遺跡 33 吉倉A遺跡 34 南中田C遺跡 35 南中田B遺跡 36 南中田A遺跡 37 惣在寺廃寺跡 38 山葉A遺跡 39 伊豆宮I遺跡 40 教寺遺跡 41 伊豆宮古墳 42 上野熊野遺跡 43 上野熊野城跡
 ※アミをかけた部分が国際健康・ラグザ建設予定地

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25,000）

住区域は、さらに東側に広がっていたものと考えられる。

周辺の遺跡としては、第1図に掲げたものが挙げられ、縄文時代（中・後～晩期）、古墳時代、奈良・平安時代、中世などの時期の遺跡が数多く立地する。縄文時代の遺跡としては大沢野台地の扇端部に立地する伊豆宮II遺跡（中期）がある他、遺跡の立地する神通川扇状地において晩期の遺物の散布が認められる。古墳時代の遺跡としては、伊豆宮II遺跡の南方に伊豆宮古墳があるほか遺物の散布が認められる。

この他の掲載した遺跡は、ほとんどが奈良・平安時代～中世（近世）の遺跡である。これらは神通川扇状地に立地する遺跡であり、県総合運動公園内の南中田D遺跡や吉倉B遺跡に代表される遺跡等々が挙げられる。また、本遺跡の北方には中世の豪族鶴川氏の居館跡である鶴川館跡やその菩提寺である最勝寺がある。周辺の墓地等においては容易に五輪塔や板石塔婆をみつけることができる。また、本遺跡の西方の新保地区は、「加茂別雷神社文書」の中の寿永3年（1184年）の源頼朝下文などの文献にみられる「加茂社領新保御厨」の比定地の一つとされている〔富山県1976〕。前出の南中田D遺跡や吉倉B遺跡などの県総合運動公園内に全部あるいは一部位置する遺跡については昭和63年度～平成5年度にかけて発掘調査を実施しており、奈良・平安時代及び中世の大規模な集落跡を検出した。上記の「加茂社領新保御厨」と関連付ける確証となるものはないが、少なくともこの辺り一帯には古代には初期莊園が形成され、10世紀初頭から12世紀前半にわたって一旦は衰退するものの、その後12世紀後半から再び大規模な新田開発の手が入る社会的背景があり、その調査成果に見られるような集落が形成されたものと推測される。これらの遺跡に北接する本遺跡の平成7・8年度の調査においても8世紀初頭～10世紀初頭（一部7世紀後半のものもあるか）の古代の集落跡と12世紀後半～13世紀代の中世の集落跡を検出している。

これらのことからこのあたり一帯は連鎖と人が住み続けていたものの、8世紀前半から大規模な開発の手が入ることによって急激に集落が広がり、一時の衰退の後再び12世紀後半から開発が始まり集落が広がったと考えられる。また、近世になると、この辺りは飛驒街道・八尾道・岩木道などが合流する交通の要地となった。

なお、任海地区的神社であり、県国際健康プラザ建設予定地内の東側に位置していた加茂神社は、平成8年11月にG地区（平成7年度に発掘調査を実施）に社務所とともに移転した。この加茂神社は、江戸後期に描かれた古絵図に記録されている。同絵図には加茂神社の南側に大杉と諏訪社という神社も記録しているが、現在は加茂神社の参道脇に大杉が残っているのみである。

II 調査の概要

1 調査に至る経緯

富山県は平成3年に策定した「新富山県民総合計画」に基づき、積極的な健康づくりを進めることを課題としており、さらに新しい県民のニーズに対応した日本一の健康県づくりの先導的な役割を果たす中核拠点として、「国際健康プラザ（仮称）」の整備を計画した。これを受けて当センターでは当該施設整備担当部局と協議を行い、本遺跡の広がりと埋蔵文化財の有無及び遺存状況を確認し、その保護措置を講ずることを目的とした試掘調査を平成6年度に実施することになった。平成6年11月に依頼を受け、直ちに試掘調査を実施したが、開発面積が広いため平成7年度までかかるとの見通しをたてた。以下、各年度の試掘調査結果を簡単に記載する。

平成6年度 調査期間は、平成6年11月21日～同年12月6日で、面積40,600m²の調査対象範囲に63箇所の試掘トレンチを設定して調査を行ない、調査面積は1,300m²になる。その結果、遺構は古代の掘立柱建物・竪穴住居、中世の掘立柱建物・土坑・溝、近世・近代の用水・河川跡が存在することを確認、遺物は古代の須恵器・土師器、中世の土師器皿・珠洲・青磁・瀬戸美濃、近世の越中瀬戸・伊万里が出土した。

平成7年度 調査期間は、平成7年4月25日～同年5月25日で、面積66,400m²の調査対象範囲に77箇所の試掘トレンチを設定して調査を行ない、調査面積は3,940m²になる。その結果、遺構は古代の堅穴住居の他、柱穴・河川跡を確認、遺物は古代の須恵器・土師器・瓦塔屋蓋部、中世の珠洲・瀬戸美濃、近世の越中瀬戸・伊万里・唐津が出土した。

以上の結果を受けて記録保存の措置を施す必要がある部分を本調査が必要な部分を決定して平成7年5月23日から本調査に着手した。平成7年度に本調査を実施した地区はA～G地区の7地区であり、古代と中世の重層部分を合計した調査面積は11,850m²、平8年度に調査を実施した地区はH～O地区的8地区であり、同じく重層部分を合計した調査面積は19,634m²になる。今回、本調査を実施したN中地区は、平成8年度においてN地区として設定した内の未調査部分にあたり、これをもって「国際健康プラザ」の整備に先立つ本調査は終了した。

2 調査地区的区割

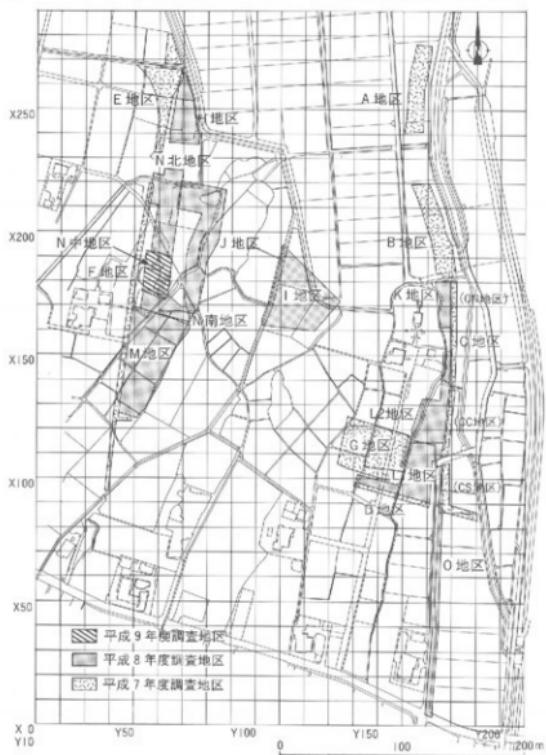
発掘調査は、事前に重機により表土の除去を行い、その後に基準杭を打設した。グリッドの設定については、平成7年度当初において開発範囲全域をほぼ覆うように設定していたので、引き続きそのグリッドを利用した。このグリッドは、国家座標（第VII系）に合わせて設定し、X軸を東西方向、Y軸を南北方向にとり10m毎に基準杭を設け、それをさらに2m毎に区切り、2m四方を一区画とした。なお、今回の調査におけるX 0 Y 0地点は、国家座標（第VII系）のX=69,850 Y=3,250にあたる。

なお、N中地区はX 173～192 Y 53～65の範囲に位置する。

3 層序

調査対象地の土層の基本層序について大まかに記述する。既往の調査地区と同様に第I～第IIIの3層に区分したが、本地区には調査前まで樹木と簡易な小屋が存在し、その以前は住宅が建っていたという点で他の地区とは若干異なる。第I層は從来通り耕作土であるが、その上に整地目的の礫混じりの盛土があり、この盛土と第I層は重機で除去した。第II層は、古代～中世にかけて堆積したと考える層で、10Y R2/1(黒色)もしくは3/1(黒褐色)を呈する砂質土である。從来中世・古代の遺物包含層として捉えてきた層である。第III層としたものは10Y R5/4(黄褐色)を呈する砂質土に3/1・6/8(明黄褐色)砂質土などが混じる層であるが、東側の調査地区のように厚くは堆積しない。

なお、平成7年度からの調査を通じての層序に関して「Vまとめ」において記述する。



第2図 調査区割と各地区的配置図 (1:4,000)

III 遺構

遺構は、古代・中世及び近・現代のものがある。古代の遺構としては、掘立柱建物が1棟と溝1条、中世の遺構としては、掘立柱建物が2棟と窓穴状土坑と竪穴建物を合わせて6基、井戸、土坑、溝3条、近・現代の遺構としては、溜め井戸・井戸、用水跡がある。以下、古代から各遺構について記述する。(なお、遺構図の内で土層図しか掲載しなかったもののセクションポイントは第3図中に示して、土層図におけるその方向は東西南北で表した。)

1 古代の遺構 (第3・4図 写真図版3・4)

SB-04 X175~177Y56~59に位置し、2列の柱列を検出した。P1がちょうどSD-04の南セクションベルトに掛かり、その観察からSB-04の方がSD-04よりも古いことが判った。東西の柱列の柱間は2.6m、南北の柱間は2.1mを測る。各柱穴の規模は、検出面での計測値でP1は推定径80cm深さ50cm、P2は径80cm深さ40cm、P3は推定径90cm深さ30cm、P5は径80cm深さ30cmである。P1の覆土は、にぶい黄褐色(10Y R6/4、以下色相の記載を省く。)P2とP5はにぶい黄褐色(5/4)砂質土に数cm大の小礫が混じる層である。P3は①層がにぶい黄褐色(5/4)砂質土に黒褐色(3/1)砂質土が混じる層で、②層がにぶい黄褐色(5/4)砂質土に数10cm大の礫が混じる層である。P4に関しては、P1と同様にSD-04に切られたと考えられるが、わずかながらその痕跡を現地において確認した。全体の規模は不明。遺構の時期は、時期決定の決め手になる遺物の出土がなく、切り合い関係からSD-04よりは古いものとしか判断できず、8世紀前半~9世紀初頭の間としておく。

SD-04 N南地区から続く溝で、Y58の位置からゆるやかに曲折しながら調査区西端のX185の位置に向かう。溝の幅は、検出面で1.6m、深さは検出面から60cmを測る。覆土は、①層が黒褐色(3/1)砂質土に、にぶい黄褐色(5/4)砂質土が混じる層、②層がにぶい黄褐色(5/4)砂質土に明黄褐色(6/8)砂質土が混じる層、③層がにぶい黄褐色(5/4)砂質土の層、④層はSB-04の覆土、⑤層がにぶい黄褐色(5/4)粗砂に大小の礫が混じる層である。この溝からは、第7図の須恵器壺1・2の破片が第6図に示すようにまとめて出土した。今回調査を行なったN中地区のX177・178の位置において溝の東壁寄りに1の破片がまとめて出土し、2の破片はX176の位置において溝の西側の壁寄りにまとめて出土した。これらの壺は溝に施棄したものと考えられる。なお、2の壺の大半の破片はN南地区を調査した際にその北端においてまとめて出土したものである。その際、溝の検出当初で壺の破片がまとめて出土したことから、遺構を土坑とみなして壺を取り上げたが、後に溝であることを確認したことを付け加えておく。これらの壺の他に須恵器の壺蓋(3)、壺身(4)等が出土した。なお、遺構の時期に関しては、9世紀末には埋まっていたものと考える。

2 中世の遺構 (第3~5図 写真図版1~3)

(1) 掘立柱建物

SB-01 X176~181Y54~59に位置する。規模は、東西方向に3間以上、南北方向に4間である。東西方向の柱列の柱間は、概ね2.3mを測り、南北方向の柱間は、第1列(東西方向の柱列を北側のものから順に第1列・第2列・第3列・第4列とする。したがって、P1~P4の柱列が第1列となる。)と第2列の間が2m、第2列と第3列及び第3列と第4列の間が2.5m、第4列と第5列の間が2mを測る。このことから、本建物は、第2列から第3列の間を身舎部分とする東西棟の建物であったと推察する。なお、覆土の記述に関しては省略する。

SB-02 X179~184Y55~59に位置する。規模は、東西方向に3間、南北方向に3間である。東西方向の柱間は、概ね2.2mを測り、南北方向の柱間は概ね2.6mを測る。P2~4・6~8に囲まれるSK-25は、本建物に取り込まれる土坑と考える。また、SK-25から出土した土師器皿とSK-13から出土したもの(23)が接合することから、SK-13も本建物に関連する可能性がある。なお、覆土の記述に関しては省略する。

S B - 0 3 X180~183 Y60~62に位置する。方形土坑の周囲に柱穴が並ぶ建物で、いわゆる掘立柱建物とは性格を異にするが、建物として捉えた。方形土坑の規模は南北3.2m×東西4mで、深さは検出面から約20cmを測る。柱穴は、方形土坑の周囲を巡って8基検出した。東西方向の柱列の柱間は1.6mを測り、南北方向の柱間は、P1とP4の間が1.8m、P4とP6の間が1.4m、これとは逆にP3とP5の間が1.4m、P5とP8の間が1.8mとなるが、合計した長さは、同じく3.2mということになる。覆土に関する記述は省略する。

(2) 土 坑・井 戸

S K - 0 4 X187~189 Y58~60に位置する。規模は南北4m×東西3mで、深さは検出面から30cmを測る。北壁から約1mのところに東西方向に2列に約40cm大の河原石を並べ、その石列の南側に40cm大の河原石を2個1組の形で東側と西側にそれぞれ1組ずつ配置する。覆土は、①層が褐色(5/1)砂質土でしまりが弱く炭化粒混が混じる層、②層がにぶい黄褐色(5/3)砂質土に褐灰色(5/1)砂質土が混じる層である。本遺構の周囲にも柱穴のような小土坑をいくつか検出した。本遺構の西側が谷部とした自然流路に切られるため、定かではないが西側に本遺構が付属する掘立柱建物が存在していたか、もしくは本遺構を取り込む形で掘立柱建物が存在した可能性がある。珠洲の甕(14)の破片と瀬戸の瓶子(15)、八尾の甕(59)が出土した。時期は、13世紀後半～14世紀前半とする。

S K - 2 4 X178~180 Y59~60に位置する。規模は南北3.6m×東西3.2mで、深さは検出面から25cmを測る。本遺構もSK-04と同じく周辺に柱穴のような小土坑がある。覆土は、ほとんどが①層とした黒褐色(3/1)砂質土に礫が混じる層で、②層とした明黄褐色(6/6)砂土に黒褐色(3/1)砂質土と小礫が混じる土が筋条に①層に入りこむ。土師器皿(29・30)とが出土した。29の土師器皿は完形の状態で出土した。この他にSD-04を切ることから、須恵器の甕(1)の破片の出土が見られる。時期は、13世紀後半～14世紀前半とする。

S K - 1 1 X180~182 Y58~59に位置する。南北3m×東西2.8m、深さは検出面から約30cmを測り、平面形は隅丸方形の南西隅が欠けたような五角形を呈する。覆土は①層がにぶい黄褐色(4/3)砂質土で、②層は黒褐色(2/3)砂質土である。

S K - 1 2 X181・182 Y55~57に位置する。南北2.7m×東西2.9m、深さは検出面から約20cmを測り、平面形は隅丸方形の南東隅が欠けたような五角形を呈する。覆土は暗褐色(3/3)砂質土に褐灰色(4/1)砂質土が混じり、炭化粒混を含む層である。

S K - 2 5 X182・183 Y56~58に位置する。南北2m×東西4.5m、深いところで検出面から35cmを測り、平面形は隅丸長方形の北東隅が欠けた形を呈する。覆土は①層がにぶい黄褐色(4/5)砂質土に小礫が混じる層で、②層が灰黄褐色(4/2)砂質土に炭化粒が混じる層である。

以上のSK-04・24・11・12・25は、すべて竪穴状の土坑であり、いずれも中世の掘立柱建物に付属する施設と考えるが、SK-04・24は独立した竪穴建物になると思われ、SB-03と同様の性格を有するものと判断する。一方、SK-11・12・25は、掘立柱建物に取り込まれる形の竪穴状土坑になると判断する。しかしながらSK-25は、SB-02に取り込まれる形で納まるが、SK-11・12に関してはSB-01と方位を同じくするものの周囲に柱穴を検出しなかったことから、SB-01の付属施設の可能性があるという段階で止めておく。

S K - 0 8 X185・186 Y56・57に位置する。径1.6m深さ約60cmを測る。途中テラス状の段になり、下方は径1.1mになる。土師器皿(17)と磁石(18)が出土した。覆土は、①層が灰黄褐色(4/2)砂質土に炭化粒が混じる層、②層が黄褐色(5/6)に灰黄褐色(4/2)が混じる砂質土、③層が褐灰色(5/1)に灰黄褐色(4/2)が混じる砂質土、④層は③層よりも黄味が弱く、⑤層が黄褐色(5/6)に灰黄褐色(4/2)が混じる砂質土、⑥層が褐灰色(4/1.5)、⑦層が黒

色（2/1）砂質土で粘性が高い。時期は、14世紀代とする。

S K - 1 3 X181・182Y57・58に位置し、径1.2m深さ40cmを測る。珠洲の片口鉢（22）、土師器皿（23～28）が出土した。SB-02の内部施設である可能性がある。時期は、出土遺物から13世紀後半～14世紀前半とする。

S K - 3 3 X181・182Y64に位置する。遺構が調査区東側に延びるためほぼ半分のみの検出となった。当初比較的浅い土坑として捉えたため土坑の略号を付したが、掘り進む内に地山である礫層を深く掘りこむ索掘りの井戸であると判断した。径は検出面で2.2mを測り、下方に行くほど径は小さくなるが検出面から1mほどのところで急激に小さくなり、そのまま最下部に達し、径は50cmほどまで小さくなる。深さは検出面から1.8mを測る。遺構の掘りこみ面は、遺物の出土は非常に少なく土師器皿（31）が出土した。覆土に関する記述は省略する。時期は、13世紀後半か。

S E - 0 1 X186Y58・59に位置する。径1.3m、深さ90cmを測る。珠洲の福鉢（34）、土師器皿（32）、青磁の碗（33）が出土した。覆土は暗褐色（3/3）砂質土に黒褐色（2/3）砂質土が混ざり合い、粘質土のブロックと炭化粒が含まれる。土師器皿（32）・青磁碗（33）・珠洲の片口鉢（34）が出土した。時期は、14世紀代とする。

以上のSK-08・13・33・SE-01は、いずれも素掘りの井戸であると考えた遺構である。しかし、SK-33に関してはその規模から推測して井戸とみなしてよいと考えるが、他の遺構に関しては、井戸とする決め手に欠けることから、その可能性があるという段階で止めておく。

（3）溝

S D - 0 1 X186・187Y61～64にかけて検出した東西方向の溝である。検出面において幅80cmを測り、深さは残りのいいところで20cmを測る。途中近・現代の溜め井戸に切られる。覆土は、①層が黒褐色（2/3）砂質土に炭化粒がわずかに混じる層で、②層が暗褐色（3/3）砂質土に小隙が混じる層である。

S D - 0 2 X183～188の範囲で調査区を東西に横切る溝である。検出面において幅50cm～1mを測る。深さは残りのいいところで10数cmを測る。覆土は、①層・②層ともにSD-01と同じである。

S D - 0 3 X182～186Y54～56にかけて検出した溝である。西側に延びるため全容は不明である。検出面からの深さは約60cmである。覆土は①層が褐色（4/4）砂質土、②層が黒褐色（3/2）砂質土、③層が黒褐色（2/2）砂質土、④層が褐色（4/6）砂質土、⑤層が黒褐色（2/2）砂質土に砂礫が混じる層、⑥層が明黄褐色（6/8）砂質土に砂礫が混じる層、⑦層が黄褐色（7/8）砂質土である。

S D - 0 5 X174～176Y60～62にかけて検出した南北方向の溝である。検出面において幅は0.8m～1.2m、深さは20cmを測る。覆土は、黒褐色（3/1）砂質土に礫が混じる。

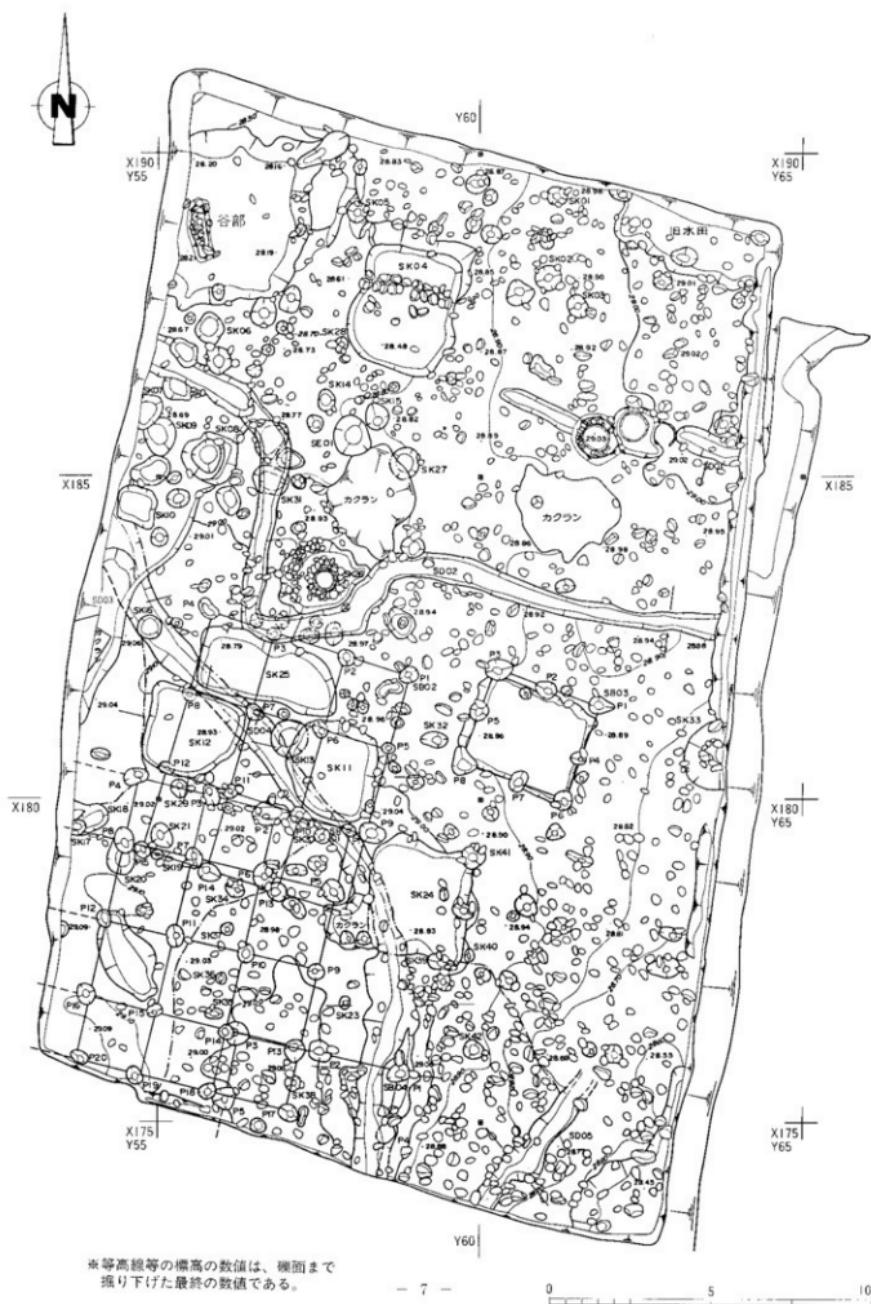
（4）谷部

調査区内の北西部隅、X188～191Y56～58にかけて自然流路の一部と思われる落ち込みを検出した。堆積状況は、砂質土・砂土・礫が互層をなす。調査区外西側へ抜けていくものと考えられる。遺物としては、古代・中世のものに限られ、中世のものが目立つことから中世後半期の自然流路の一部と考える。

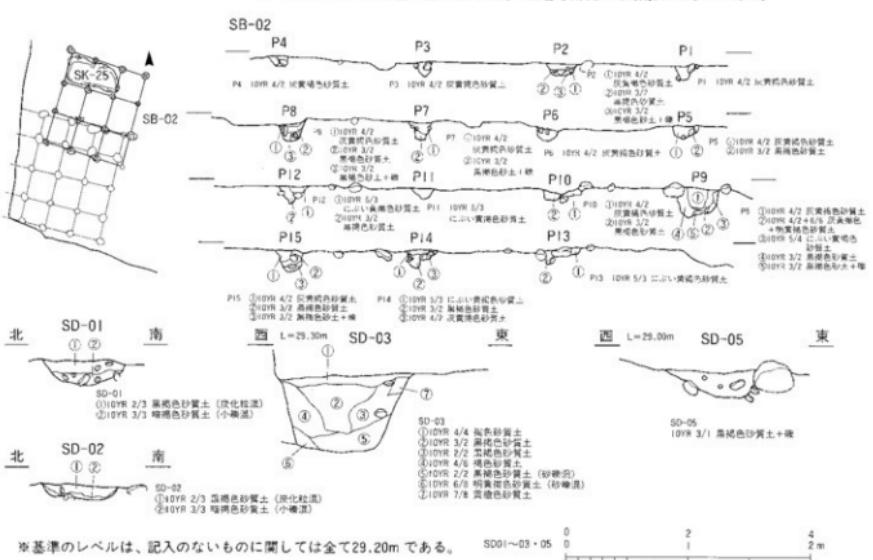
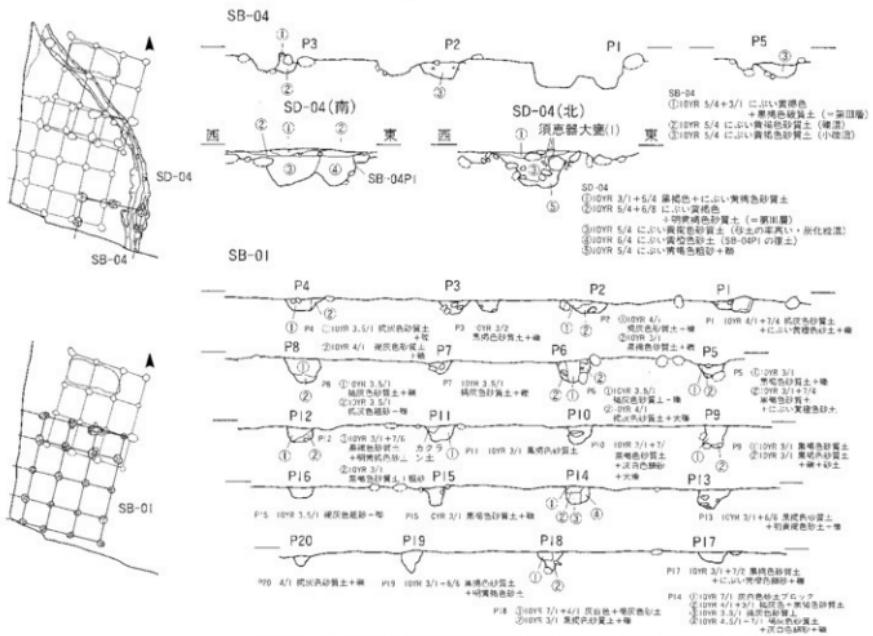
3 近・現代の遺構

X186Y62・63の位置に溜め井戸がある。3基の底の部分のみが残っていたが、東側の2基はコンクリート製で、西側の1基は、礫を円形に巡らせてその中を泥で成形したものである。西側のものが最も古く、最も新しいものは、中央のものと推察する。

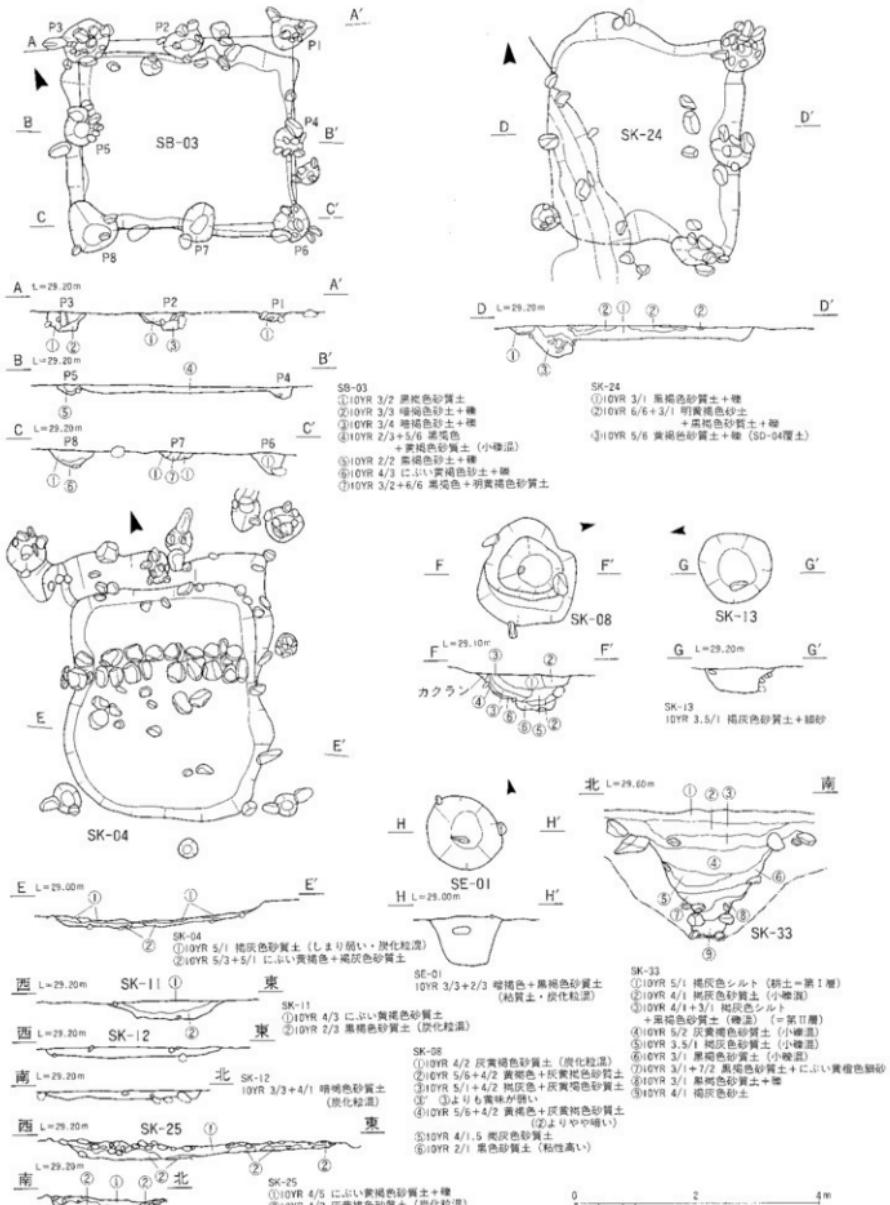
X184Y58の位置にある井戸は数10cm大の大きさの礫を円形に並べて平坦にした上に石を割り貫いた井戸枠を搭せている。井戸枠には石塗の痕が残っている。昭和年代に住宅があった頃まで使用されていたものである。



第3図 任海宮田遺跡 N 中地区遺構配置図 (1/150)



第4図 遺構土層図 (1/80、但し SD01~03・05は1/40)



第5図 遺構平面図・土層図 (1/80)

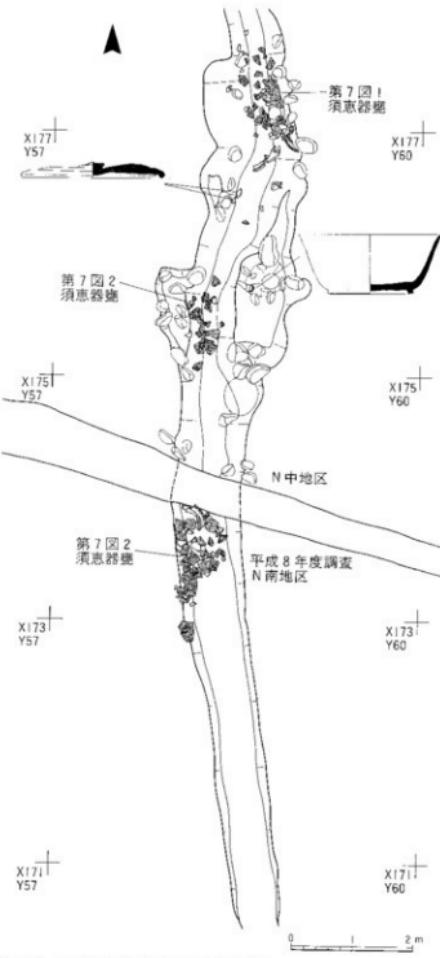
IV 遺 物

出土した遺物には、奈良・平安時代の須恵器・土師器、中世の土師器皿・珠淵・越前・青磁・白磁、近世以降の陶磁器類、鉄製品があり、その量は浅箱にして 6 箱程度である。以下、古代から順に記述する。

1 古代の遺物（第 7・8 図 写真図版 5）

(1) 遺構の遺物

古代は、遺構自体が少なく、SD-04 出土の遺物のみが遺構に伴う土器であり、須恵器の大型の甕（1・2）・壺蓋（3）・环身（4）が挙げられる。1・2 は「IV 遺構」において記述したとおり溝の東西壁に沿うように南北に分かれ、まとまった形で出土した。第 6 図がその出土状況図である。2 の甕は平成 8 年度に調査を実施した N 南地区において大半の破片がまとまって出土しており、その位置関係は図に示したとおりである。1 は、口径 48cm で肩の部分が張り出して胴部に向かって急激に屈曲する曲線を描く。最大径は、88cm である。内面の当て具には 4 種類の当て具を用いている。（1・2 の甕の当て具の変わり目については、おおよその位置を図中に示して、それぞれの当て具の違いは拓本で表現した。）また、粘土の継目が焼成の際に開いたと思われる部位には、継目にそって横方向に黒いタール状のもので割れ目を埋めている。この埋めているものの材質に関しては、今回特定できなかったが非常に堅固な一見してガラス質に見えるものであり、材質の特定を試みる必要がある。2 の甕は、前述したとおり、昨年度の調査において大半の部分が出土しており再度の掲載になるが、同じ溝からの出土であり、また破片の一部が今回の調査でも出土したことから再度掲載した。2 は、口径が 57cm、胴部の最大径は 97cm、器高は推定で 102cm 程度になると想われる。内面の当て具には 3 種類の当て具を用いている。いずれも 8 世紀後半頃のものと思われる。3 の壺蓋は、口径 15cm、器高は（歪んでいるが）1.9cm で、径 2.7cm のつまみが付く。口縁端部は、稜があるものの極めて丸く仕上げている。頂部は削り調整を施す。2 片に割れた状態で出土したが、完形品である。4 の环身は口径 15cm、器高 6.1cm、底径 9cm を測る。底部は、ヘラ切りで高台を有する。底部外面には 3 文字ほどの墨書きが認められるが、かすかな痕跡のみで判読できない。3・4 ともに時期は 1・2



第 6 図 SD-04 遺物出土状況図 (1/80)

の壺と同じく8世紀後半とする。

(2) 包含層の遺物

A 須恵器

5は、高台を有さない壺で、推定口径11.3cm、同じく器高3.2cm、底径7cmで底部はへら切り後になでて仕上げている。6は坏蓋で口径15cm、器高3cmで、径2.7cmのつまみが付く。頂部は削り調整を施す。7は口径15.4cm、器高2.2cm、径2.5cmのつまみが付く。頂部は削り調整を施す。8は坏身で、口径12cm、器高4.2cm、底径8cmを測る。底部は、へら切りで高台を有する。9は高台を有する坏身の底部で、底径11cmを測る。底面にはへら切りの痕跡がある。10は鉢で、外径して立ち上がる頸部に球状に近い丸い脛部が付く。口径20cm、器高は推定で25~26cm程度になると想われる。胴部の下半は、叩きによる成形をしており、外面は細かな格子目の叩き具、内面は同心円文の当て具を用いる。一方、体部上半は外面は横方向のカキメ、内面は縦方向のハケメ調整をほどこす。類例をみると、このような形態の鉢には把手が付くことから、この鉢も把手を有すると考える。以上の遺物の時期は、8世紀前半~後半と考える。

B 土師器

11は、小型の壺の口縁部で、内面には縫が付着する。口径は12cmを測る。内外面ともに調整は不明。12は楕で、口径は測定できない。口縁端部が外側に屈曲するもので、内面は磨き調整を施す。13は、壺の口縁部である。口縁部しか実測困難できなかったが、写真図版には剖面も掲載した。口径は、22cmを測る。口縁部は、内面カキメ調整、外面ナデ仕上げ、脣部は内面に縦方向と横方向のハケメ調整を施し、外面はカキメ調整の後に削って仕上げる。以上の遺物の時期も須恵器と同じく8世紀前半~後半のものと考える。

2 中世の遺物 (第8・9図 写真図版5・6)

(1) 道構の遺物

SK-04 珠洲の壺(14)・瀬戸の瓶子(15)・八尾の壺(59)が出土した。14は、頸部の立ち上がりがほとんどなく、外側に向かって折り曲げる。口径は、不明。図化したものは口縁部だけであるが、破片はこれ以外の破片も道構内及び周辺包含層から出土した。15は、瀬戸の瓶子の口縁部で口径は5cmを測る。59の越前の壺は体部の破片である。14の珠洲の壺は、III期に比定できる。

SK-07 土師器皿(16)が出土した。非ロクロ成形で口径8cm、推定器高1.8cmを測る。時期は13世紀後半頃。

SK-08 土師器皿(17)と砥石破片(18)が出土した。17の土師器皿は非ロクロ成形で推定口径7.2cm、推定器高1cmであり、時期は14世紀代。18の砥石は幅約3cmを測り、被熱している。

SK-09 土師器皿(19)・越前の片口壺(20)が出土した。片口壺の口径は6.3cmを測り、ちょうど注口の下にある肩の部分に「十」のような笠掛の刻文がある。時期は14世紀代とする。

SK-10 白磁の皿の底部(21)が出土した。底径は、5.5cmである。

SK-13 珠洲の片口鉢(22)・土師器皿(23~28・60)が出土した。珠洲の擂鉢は、口径28cmを測り、器高は推定で10cm程度になると想われる。23~28の土師器皿は全て非ロクロ成形で、23は口径7.4cm器高1.5cm、24は口径7.6cm器高1.5cm、25は口径8cm器高1.5cm、26は口径11cm器高2.1cm、27は口径13cm器高2.5cm、28は口径14cm器高は推定で2.1cmをそれぞれ測る。22の珠洲の片口鉢は、III期に比定できる。

SK-24 土師器皿(29・30)が出土した。29は完形品で口径8.1cm器高1.7cmを測り、非ロクロ成形である。口縁部にはヤニ状の付着物が認められる。外面は全面に被熱した痕跡が認められる。30は口径13cmを測り、器高は2.5cm程度になると推定される。時期は29が13世紀後半~14世紀初で、30も同時期とみる。

- S K - 3 1** 珠洲の片口鉢（32）が出土した。口径30cmを測る。IV₂～V期に比定できる。
- S K - 3 3** 上部器皿（31）が出土した。非ロクロ成形で口径12cm器高2cmを測る。時期は、13世紀後半とする。
- S E - 0 1** 土器器皿（33・61）・珠洲の片口鉢（35）・青磁の椀（34）が出土した。33の土器器皿は非ロクロ成形で、口径13cmを測り、器高は2.5cm程度になると推定される。35は片口鉢の底部で、底径12cmを測る。34の青磁の椀は、連弁文である。
- S D - 0 3** 土器器皿（51）がある。非ロクロ成形で口径7.4cm器高1.7cmを測る。時期は、13世紀後半～14世紀前半とする。

（2）谷部及び包含層の遺物

A 土器・土製品・鉄製品

調査地区内北西部の谷部としたところから出土した遺物と包含層から出土した遺物について併せて記述する。出土したものには土器器皿・珠洲・越前・八尾・青磁・砥石・鉄製品がある。

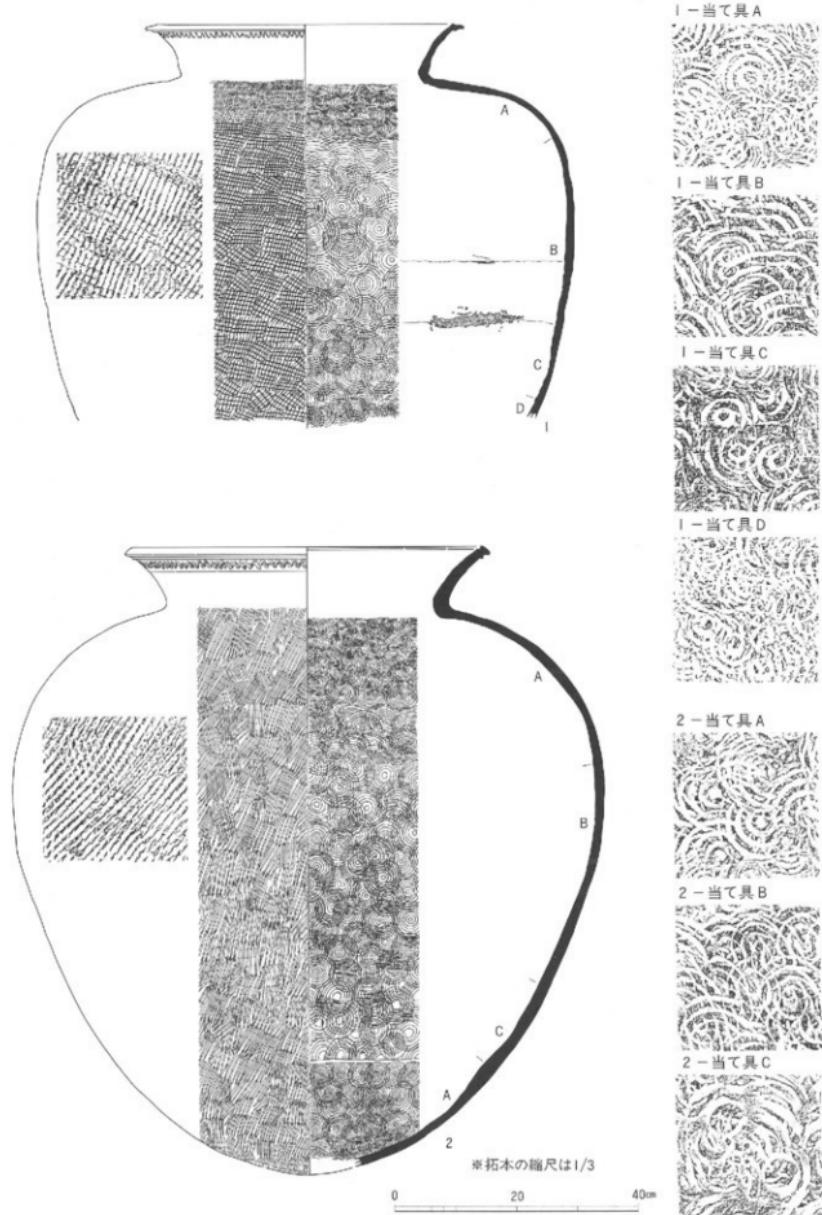
36～38・41・42はいずれも珠洲の片口鉢である。36は、口径29cmを測る。36・40・41が谷部から出土したものである。時期は36がIII期、37・38がI₂～II₂期、40がIV₂～V期に比定できる。39は、瓶の口縁部か。43・45・46は珠洲の甕である。43は、甕の肩部の櫛目文をほどこした部分にあたると思われる。櫛目文は、横方向の櫛目の上に密な間隔で縦方向の櫛目をほどこしている。45は甕の口縁部である。46は甕の底部で、底径は9cmを測る。ロクロ成形をしているが、底面より2cm上方から叩き目を認められる。内面は、擦って摩耗している。時期は、43がIII～IV期、45がIV₁に比定できる。44は甕で、底部のあたりの破片であると思われる。47～54は土器器皿で、全て非ロクロ成形である。47は口径7cm器高1.7cm、48は口径7.6cm器高1.5cm、49は口径7.6cm器高1.7cm、50は口径が不明で器高2.3cm、52は口径7.6cm器高1.6cm、53は口径11cm、器高2.1cmをそれぞれ測り、53は口径16cmで器高は3.5cm程度と推定される。なお、47・50・52の口縁部にはヤニ状の付着物が認められる。53は谷部からの出土である。時期は47～49、51～53が13世紀後半～14世紀前半、50が14世紀後半、54が15世紀初頭か。55は青磁の椀で連弁文が施される。56は摺鉢の破片で越前か。時期は不明。57は砥石で石材は流紋岩質凝灰岩で、残存部の長さは4.5cmを測る。58は鉄製品で鉋と思われる。

以上が図化した遺物であり、以下に図化できずに写真図版に掲載したものに関して記述する。なお、遺構の項で記述したものに関しては重複して記述しない。

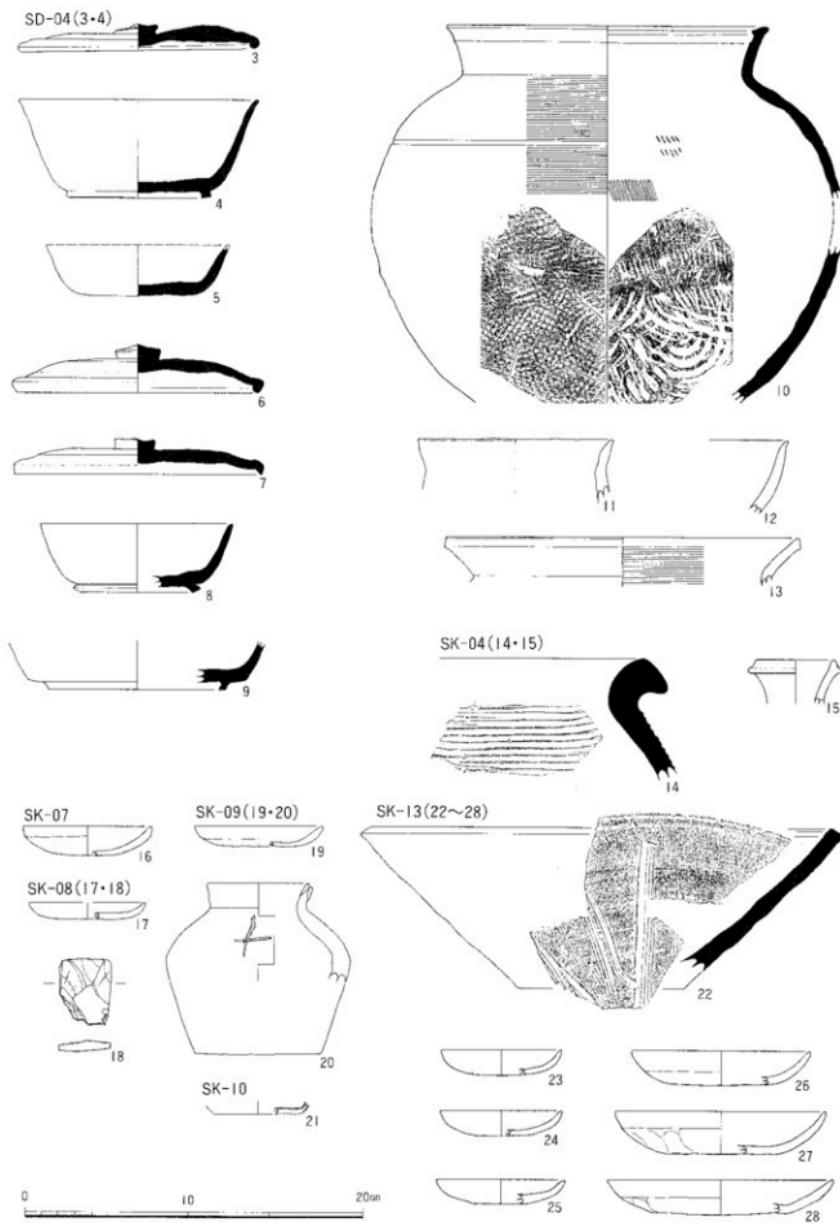
62は青磁の椀の口縁部、63は青磁の水注の把手部分と思われるもの、64は越前、65は八尾の甕、66は珠洲の片口鉢の口縁部、67は素焼きの土製品で、長さ4.1cm厚さ1.1cmを測り輪状なると思われるが用途は不明である。

B 古銭

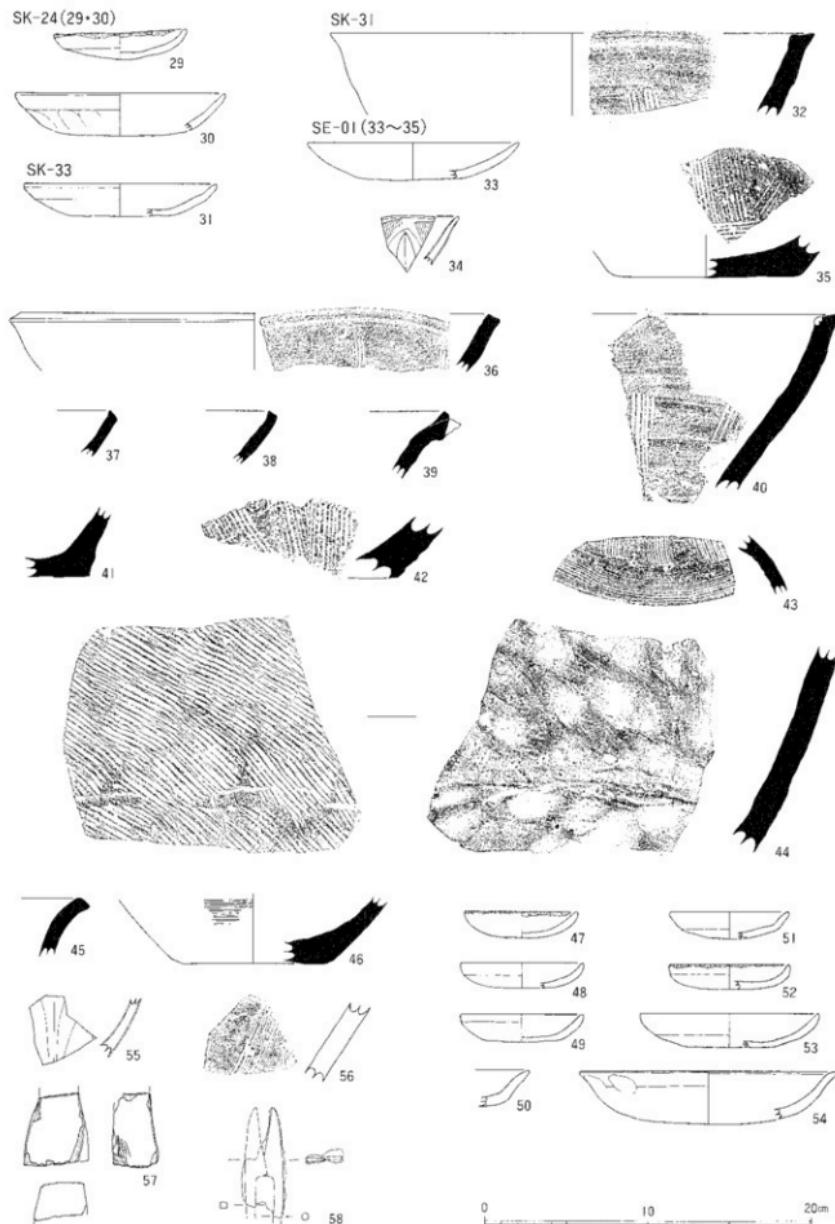
68～77の古銭（全て北宋銭）がX186Y56の地点からまとまって出土した。68～71の4枚と73・74の2枚は、文字面を同一方向に向けた形で鑄造していたことから、「さし」の状態であったもの一部であることが推察される。68は「淳化元寶」（初鋤年990年）、69は「大觀通寶」（初鋤年1107年）、70は「熙寧元寶」（初鋤年1068年）、71は「嘉祐通寶」（初鋤年1056年）か、72は篆書体の「熙寧元寶」、73は「大觀元寶」（初鋤年1023年）、74は「祥符通寶」（初鋤年1009年）、75は「祥符通寶」、76は分楷体の「政和通寶」（初鋤年1111年）、77は篆書体の「元符通寶」（初鋤年1098年）である。



第7図 遺物実測図 (1/8)



第8図 遺物実測図 (1/3)



第9図 遺物実測図 (1/3)

V まとめ

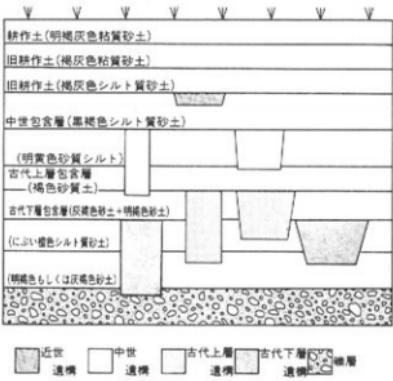
1 はじめに

国際健康プラザの整備に先立つ任海宮田遺跡の発掘調査は、平成7年度来3ヵ年にわたり実施してきた。しかし、隣接地区でありながらも各年度毎に切り離してなされてきた報告について、最終年度ということから若干のまとめをここで行なう。まとめにあたっては、まず平成7年度からの調査実施地区全体に関する所見、その後に古代と中世の遺構のありかたについて主に記述する。

2 層序

立地環境に関しては、「I 位置と環境」において述べたが、ここでは今後実施されるであろう周辺の調査に資するためにも層序に関する所見から記述する。任海宮田遺跡（以下、本遺跡とする。）と同じく神通川扇状地に立地し、同遺跡に南接する県総合運動公園内遺跡群（ここでは、県総合運動公園の整備に先立つ発掘調査対象となった10遺跡—吉倉B遺跡・任海遺跡・任海錦倉遺跡・南中田D遺跡・栗山権原遺跡・任海砂田遺跡・吉倉A遺跡・南中田C遺跡・南中田B遺跡・南中田A遺跡—を便宜上こう呼ぶこととする。）の調査を、その整備に先立ち平成元（1989）年度から平成5（1993）年度にかけて実施した。これらの一連の調査結果を切り離して周辺の遺跡を考えることはできないので、その調査結果も併せて考えていくこととする。県総合運動公園内遺跡群の調査における基本層序については参考図に示したとおりであるが、これは平成5年度に調査を実施した吉倉B遺跡のものである。前記した調査を実施してきた地域は、いずれも水田であったので、表土もしくは第1層としたものは灰色を呈するシルトであり、近・現代の耕作土である。遺物の包含状況はわずかであることから、重機で除去してきた層である。これらの耕作土の下に堆積するのが県総合運動公園内遺跡群の調査においては、中世以降に堆積したと捉えてきた層である。中世の遺構は、この層中から掘り込むものと思われるが、検出は困難である。したがって、古代の遺物包含層とした明黄色を呈する層まで掘り下げた段階で中世の遺構検出を行なった。古代の遺構は、この明黄色を呈する層もしくは褐色及びぶい橙色を呈する層において検出することができる。平成5年度に実施した吉倉B遺跡の調査地区においては、古代における8世紀前半の遺構とそれ以降の遺構の層位的な区分ができた。8世紀前半の古代の遺構が掘り込みにぶい橙色を呈する層の下は、粗い砂の層と礫層が堆積する。以上が県総合運動公園内遺跡群における層序に関する所見である。なお、土性に関しては、県総合運動公園内遺跡群及び平成7年度米の任海宮田遺跡の調査地区に関して、従来さまざまな表現をなしてきたが、ここでは新・旧耕作土等水田に由来するものをシルト、中世以前に堆積したものを砂質土として統一する。

さて、平成7年度来実施してきた任海宮田遺跡の層序に関しては大まかには第11図のとおりである。第Ⅰ層は、近世から現代までの耕作土と客土で構成されており、灰色を呈するシルトである。これらの層は、重機で除去した。なお、近世の水田に由来する層は、近・現代の耕作土層よりも黒っぽい灰色を呈する。第Ⅱ層は、古代～中世以降に堆積したと考える層で黒褐色を呈する砂質土である。この第Ⅱ層に関しては、県総合運動公園内遺跡群における見解と若干異なってくる。この黒褐色を呈する



第10図 吉倉B遺跡基本層序模式図

砂質土は、中世以降に堆積した層と捉えてきたが、遺構の検出状況や遺物の包含量などからして9世紀末～10世紀前半頃から堆積し始めたものと考えられる。その根拠として具体的には、C (CC) 地区及びL 1 地区で検出した掘立柱建物の柱穴及び同建物に取り込まれる竪穴状土坑の覆土として、氾濫により堆積した灰白色の細かな砂が認められ、そのことから第II層上面において遺構の掘り込みを認められる点の他、L 1 地区で検出したSI-04・05・06・10の覆土が黒褐色を呈することが挙げられる。第III層は、主に黄褐色を呈する砂質土で、古代の遺物包含層であるとともに遺構検出面である。任海宮田遺跡においても、この古代の堆積層を新・旧で分層することができる地点もあるがその場合、新しい層は、古い層に比して、より褐色がかる。なお、古代の遺構検出に関しては、竪穴住居は遺物の集中具合やカマドの痕跡、堅固な床面を手がかりに、少なくともその存在を窺えることが多いが、掘立柱建物の検出は困難であると言える。礫層に掘り込む柱穴の検出は比較的容易であるが、そうでない場合の柱列の確認は難しく、この点に注意する必要がある。

なお、土色の明度・彩度に関しては、任海宮田遺跡及び県総合運動公園内遺跡群においては概ね7.5Y R及び10Y Rでカバーできる範囲にある。

なお、任海宮田遺跡のI地区の層序は、様相を異にするので、詳細は昨年度の報告書を参照していただきたい。

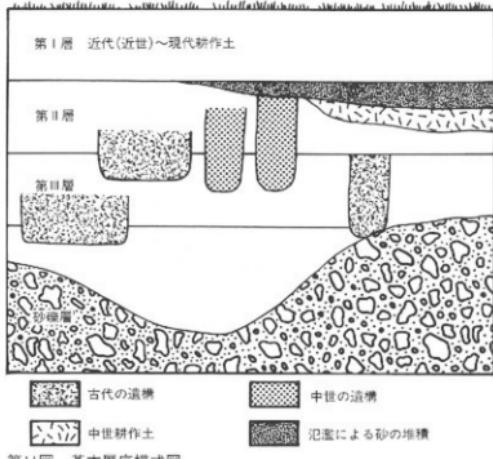
3 古代と中世の建物遺構の立地（第12・13図）

ここでは、平成7年度から実施してきた調査の成果を踏まえて、古代の竪穴住居・掘立柱建物、中世の掘立柱建物などの配置状況を全体的に眺めて主にその居住域の立地について簡単にまとめる。なお、ここでは古代と中世の遺構に限ったので、それ以外の時代の遺構に関しては図示しなかったことをことわっておく。

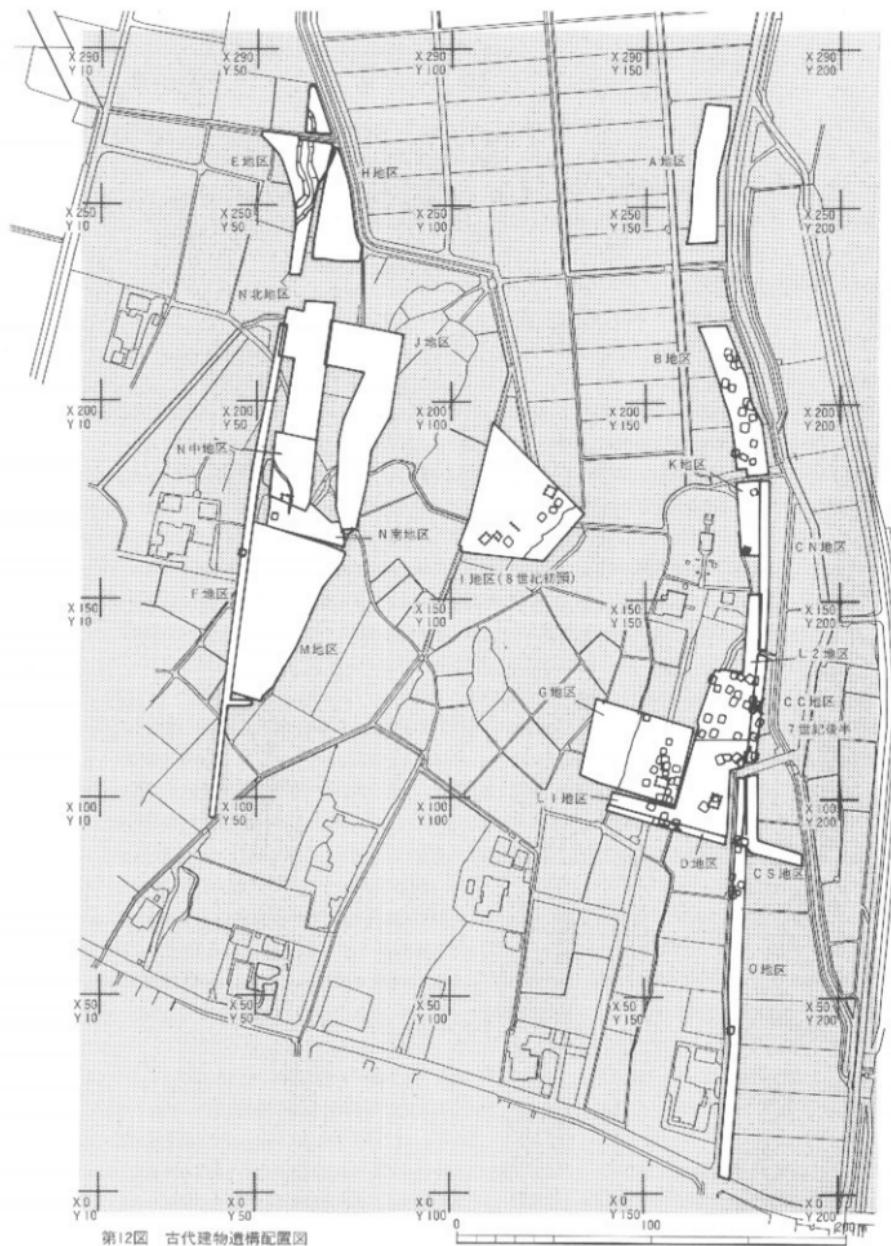
(1) 古代の遺構

古代の遺構は、主に8世紀前半～10世紀初頭のものが多く、調査を実施したA～O地区の中でもB・C (CC) ・——CN地区にも本来存在したと考えるが、近代の氾濫により破壊されたものと思われる。——・D・G・L 1・L 2地区の調査対象地内の現在の熊野川寄りの自然堤防上に集中して確認される。（第12図中に四角で表現したもののが竪穴住居であり、掘立柱建物は区別できるように柱跡をドットで表した。）F地区とN南地区においては、いずれも9C後半の竪穴住居を各1棟検出した。

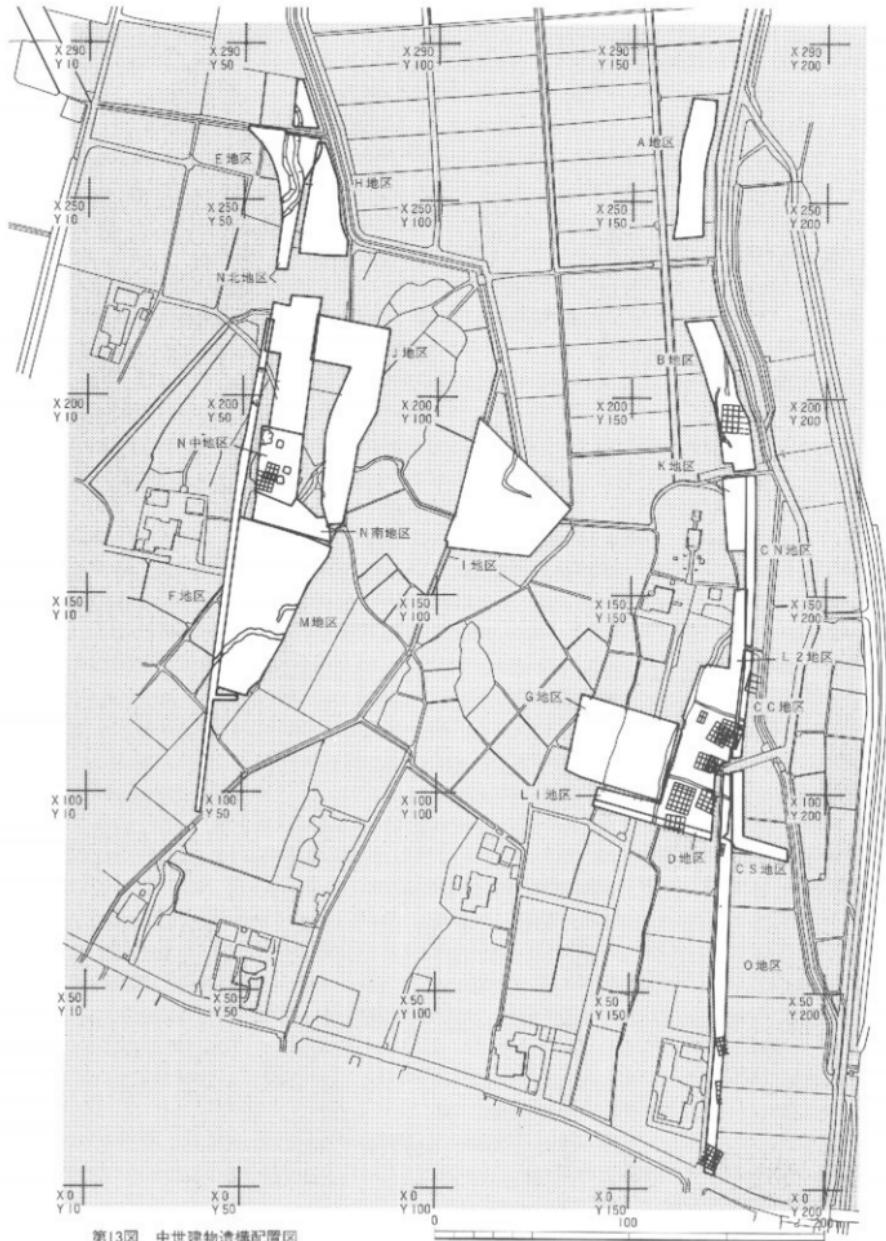
しかし、これらの8世紀前半～10世紀初頭の竪穴住居群のありかたと様相を異にするのがI地区である。I地区においては、8世紀初頭の竪穴住居群とそれに付随すると考えられる掘立柱建物群の存在を確認した。これらの遺構が立地する面は前述した竪穴住居群が立地する面よりも低く、比高差は1.5m～3mほどになる。8世紀初頭段階における竪穴住居に関しては、県総合運動公園内遺跡群と任海宮田遺跡においてはこれほどまとまった形で検出したのは、初めてであり、今後の調査において留意する必要がある。しかし、何故この時期の遺構がこの地点に集中するのかといった点に関しては不明であり、今後検討されていく必要があろう。



第II図 基本層序模式図



第12図 古代建物遺構配置図



第13図 中世建物造構配置図

なお、C（CC）地区において7世紀後半の竪穴住居1棟を確認した。このことからすると西側あるいは東側の自然堤防上に竪穴住居等が立地し始めたのは、8世紀初頭よりも降ると断定することはできない。ただし、7世紀後半の竪穴住居の検出はこれ1棟のみで、遺物の出土も全体を見渡しても極めて少なくC（CC）地区以外では、東側のJ・F地区から若干の出土を見る程度である。これらのことから本格的な開発が始まるのは、やはり8世紀代に入つてからといふことが推察できる。

また、掘立柱建物は8世紀初頭よりも降ると思われるものに関しては、その検出が困難なこともありC（CC）・G・K・L1・N中地区においてそれぞれ1棟ずつ計5棟を検出したのみであるが、立地場所に関しては竪穴住居と重なると言える。（なお、C（CC）地区の掘立柱建物については、平成7年度の報告では、掲載していない。これは後に検討した結果気付いたことであり、同地区において検出したSK-04・46とSI-01のカマドを切る土坑とSI-02のカマドを切る土坑を柱穴として調査区外東側へのびる掘立柱建物になると考える。）

（2）中世の遺構

中世の掘立柱建物のありかたも、概ね古代の竪穴住居・掘立柱建物と同様であり、B・C（CC）・D・L1・L2・N中地区において集中を見た。ここで、古代と違うのは、G・I地区において全く検出しなかったことである。（CN地区に関しては、古代の見解と同じ）

中世の掘立柱建物は、特にL1地区にその集中が見られ、同じ場所での数回の建て替えをみてとることができる。また、時期的な流れとしては、B地区で検出した掘立柱建物が12世紀代のものと思われ、C（CC）地区及びL1地区に広がる掘立柱建物群とO地区の南端に検出した掘立柱建物は、3期に区分される（平成8年度報告を参照）ものの、主に13世紀前半～後半に位置付けられる。この時期には掘立柱建物内に隅丸の長方形を呈する竪穴状土坑を2基直交方向に設け、井戸も屋内に取り込むようになり、屋外には区画溝を設ける。これと似たような間取りになるものに県総合運動公園内遺跡群の古倉B遺跡で検出したSB-27があるが、この建物に井戸は伴わない。（同地域においては、専ら川水を利用していたか共同で井戸を利用していたものと考える。）さて、今回の調査で検出したSB-01・02とその外部施設を考えるSB-03・SK-04・24などのありかたは、13C後半～14C前半に位置付けられる。なお、集落の存続は、出土遺物の時期から15世紀前半には終結すると推察する。また、現在も舟海・友松地区の境となる用水の起源が、D・G・L1・L2地区においてこれに重なる溝を検出したことから中世までに通ることが分かった。

4 まとめ

県総合運動公園内遺跡群の調査も含めて簡単にまとめると、周辺一帯の大規模な開発が本格的に始まったのは、8世紀前半からであり、それが9世紀末～10世紀初頭には急速に衰退する。この動向からして、初期莊園が営まれていたものと推察される。また、それは「蟹田」（任海宮田遺跡の富山市教育委員会が調査した地区から出土、また、このことからF地区から出土した墨書き土器の文字も「蟹田」の一部であることが分かる。）と墨書きした土器の出土などからも窺うことができる。この後、集落は姿を消し再び現われるは12世紀後半に入ってからである。この際にも大規模な水田開発、いわゆる中世の莊園開発が開始されたと推察される。果たして、この莊園が『加茂別雷神社文書』の中に見える「加茂社新保御厨」であるか否かは現段階では不明であるが、前述したように集落の発展が莊園開発を起源とするということはできると考える。

以上、極めて簡単ではあるが、平成7年度末の調査結果を全体的に眺めた所見について記述した。県総合運動公園内遺跡群の調査も含めると、周辺の調査は昭和63年度以来続いている。日々資料が増加している。今後の資料の増加によりさらなる検討がなされていく必要がある。

本項においては非常に大まかなことを記述したのみで、未消化のままの部分が多いと考える。古代における墨書き

器の問題、特に最近数多く出土している「城長」の意味するところや、瓦塔（G地区及び平成7年度の試掘調査で出土）の出土や仏器写しの土器の出土などが意味する、集落における仏教信仰のはいりこみの状況、石帶の出土（L2地区で出土）が示す問題など検討を要する事項は多いと考える。

また、中世においては建物の発展過程からみた屋内・外の機能分化や、建物と墓域との関連など（L2地区のSK-18とSK-103とL1地区で検出した掘立柱建物群の関係）に関しても検討を続けていくべき事項が多い。

参考文献

- イ 池野正男 1987 「射水丘陵における8世紀後半の須恵器窯跡」『大境』第11号 富山考古学会
池野正男 1988 「射水丘陵における9・10世紀の須恵器窯跡」『大境』第12号 富山考古学会
岩倉節郎・上野 章 1985 「井波町犬藪遺跡出土遺物の紹介」『大境』第9号 富山考古学会
カ 河西健二 1991 「『III 研究レポート 5 塚穴状土坑』『埋蔵文化財年報(5)』(財)富山県文化振興財团
埋蔵文化財調査事務所
- チ 中世土器研究会編 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」
- ト 研波市教育委員会 1978 「富山県砺波市柏横野遺跡予備調査概要」
富山県 1976 「富山県史通史編 I 原始・古代」
富山県埋蔵文化財センター 1990 「栗山権原遺跡・南中田A遺跡・任海鎌倉遺跡・南中田C遺跡」
1991 「富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告書」
1993 「富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査報告(3) 任海遺跡・吉倉A遺跡
・吉倉B遺跡」
1994 「富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査報告(4) 吉倉B遺跡」
1996 「富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書」
1997 「富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書II」
富山市史編纂委員会 1987 「富山市史 通史(上巻)」
富山市教育委員会 1978 「富山市奥羽富山町遺跡発掘調査報告書」
1985 「任海遺跡発掘調査報告書」
1987 「長岡杉林遺跡」
1989 「昭和63年度富山市埋蔵文化財発掘調査概要」
1989 「富山県総合運動公園内遺跡発掘調査概要」
1990 「平成元年度富山市埋蔵文化財発掘調査概要」
1990 「富山市任海砂田遺跡発掘調査概要」
1997 「発掘速報第96 富山市の古代文字～富山市内遺跡出土墨書き土器」富山市考古資料館報 第32号 富山市考古資料館
富山大学考古学研究室 1989 「越中上末塗」富山大学考古学研究報告第3冊 富山大学人文学部考古学研究室
フ 藤井一二 1997 「「塙田」と「觀音寺」の墨書き土器」『発掘速報第96 富山市の古代文字～富山市内遺跡出土
墨書き土器』富山市考古資料館報 第32号 富山市考古資料館
婦中町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター 1995 「富山県婦中町中名II遺跡発掘調査報告」
ホ 北陸中世土器研究会 1997 「中・近世の北陸－考古学が語る社会史－」
ヨ 古岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館

報告書抄録

ふりがな 書名	とやまけんとやましおみみやたいせきはっくつちょうさぼうこくしょ 富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書 III							
編著者名	境 洋子							
編集機関	富山県埋蔵文化財センター							
所在地	〒930-0115 富山県富山市茶屋町206番地3号							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
とうみみやたいせき 任海宮田遺跡	とやまけんと 富山県富 やまし たらもアサ 山市友杉	16201	501	36° 37° 50°	137° 12° 08°	19970512 19970619	607	「国際健康ブ ラザ(仮称)」 整備に伴う本 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
任海宮田遺跡	集落跡	奈良・ 平安時代		掘立柱建物 溝	1棟	土師器(含 赤彩・内黒) 須恵器		
		鍾倉 ・室町時代		掘立柱建物 井戸 土坑 溝 井戸	3棟	土師器皿・珠洲・越前・八尾 青磁・古銭・鉄製品(鍼等)		
		近・現代				陶磁器		





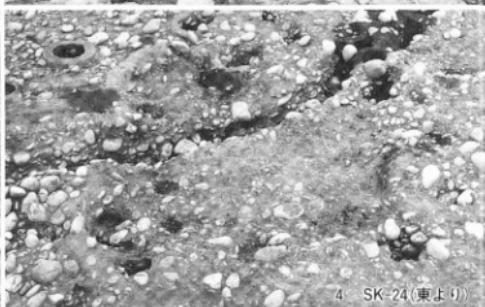
1 SK-12東西土層(南より)



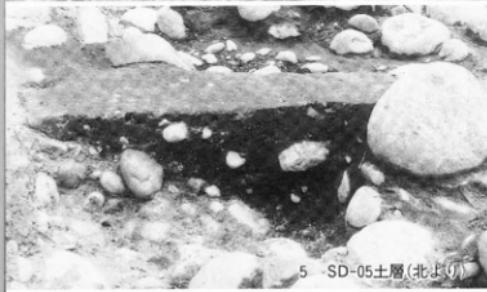
3 SK-24東西土層(南より)



2 SK-12南北土層(東より)



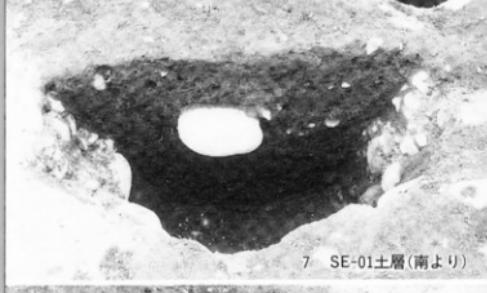
4 SK-24(東より)



5 SD-05土層(北より)



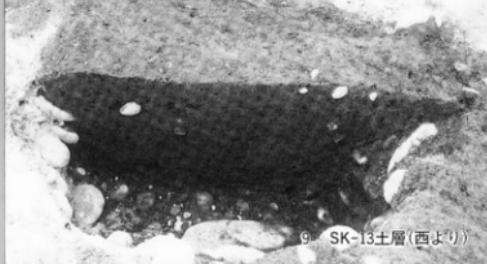
6 SK-25東西土層(南より)



7 SE-01土層(南より)



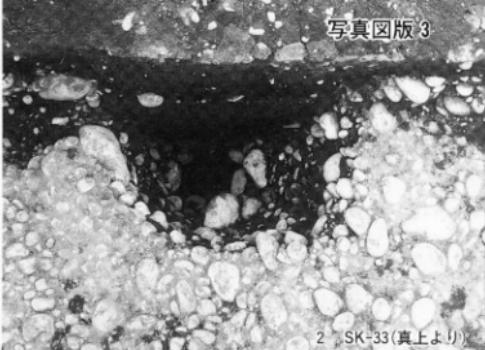
8 SK-08土層(東より)

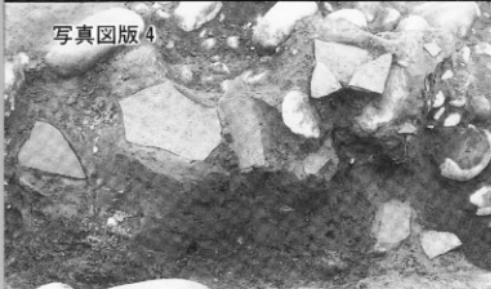


9 SK-13土層(西より)



10 北西谷部土層(東より)





1 SD-04須恵器(2)出土状況(東より)



2 SD-04須恵器(2)出土状況(南より)



3 SK-24とSD-04の土層の切り合い(南より)



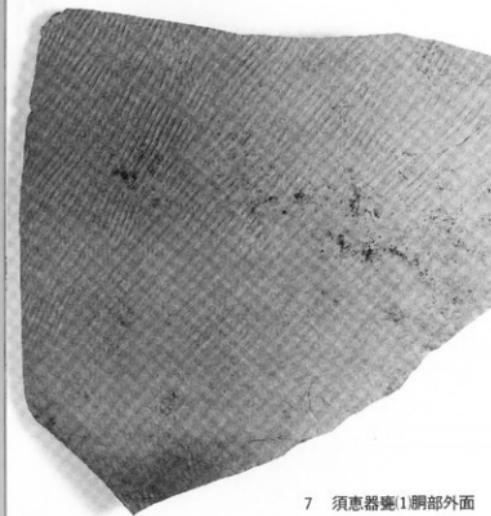
4 SD-04完掘状況(南より)



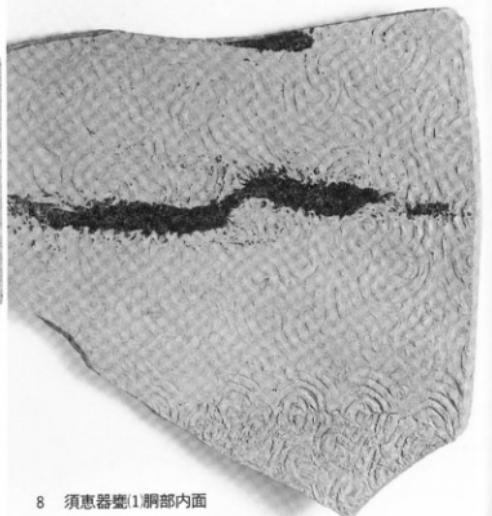
5 SB-04(東より)



6 近・現代溜め井戸(南より)

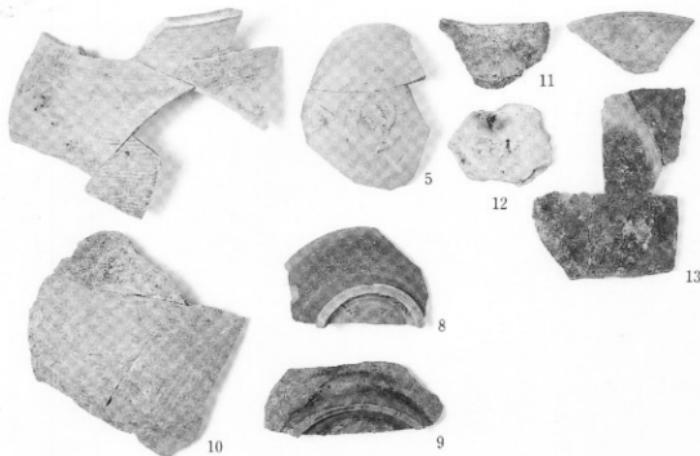


7 須恵器壺(1)胴部外面

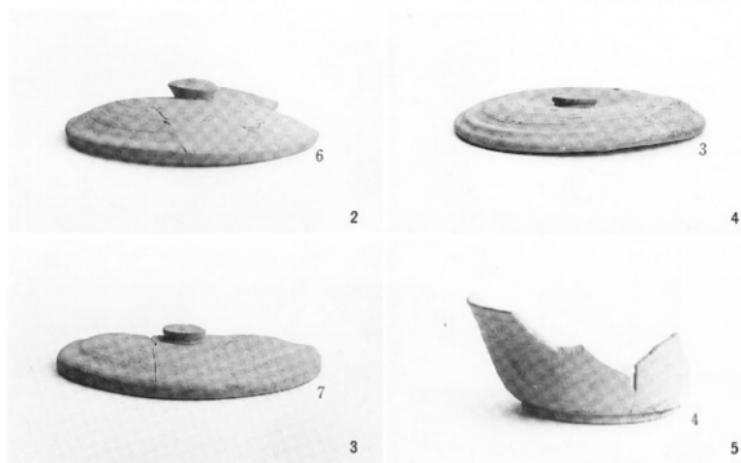


8 須恵器壺(1)胴部内面

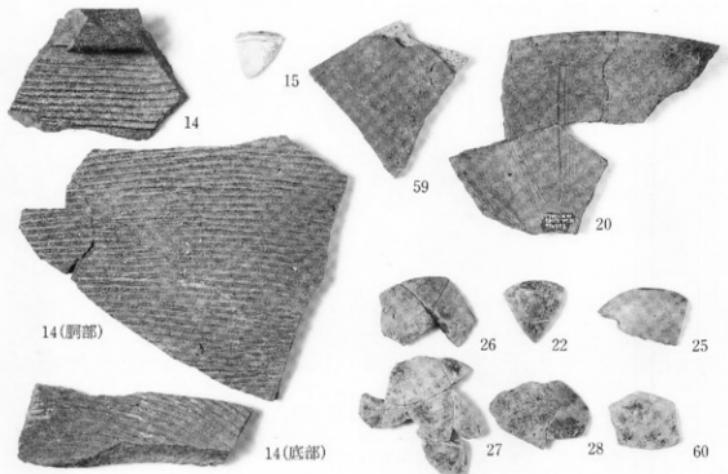
1 古代の土器

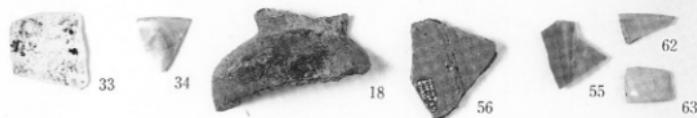


2・3 須恵器の杯蓋
4・5 SD-04出土須恵器

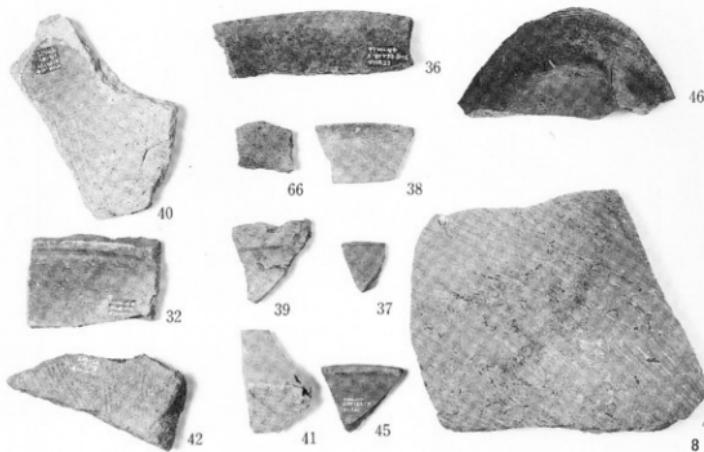


6 SK-04・13出土遺物

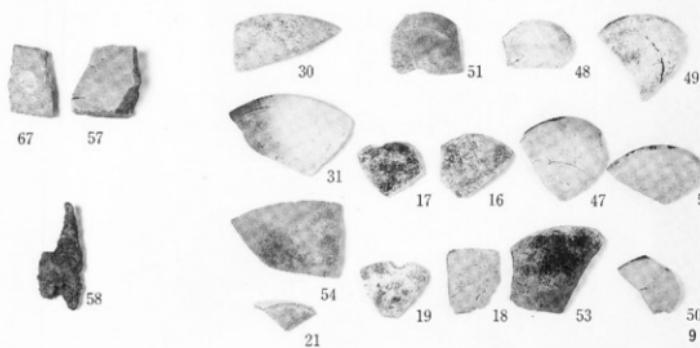




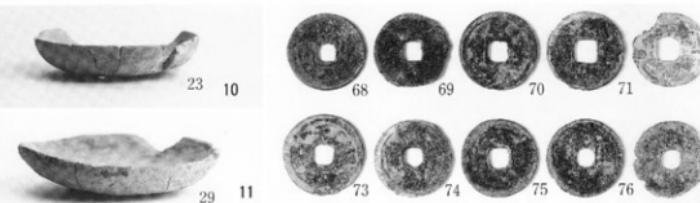
7 SK-09-SE-01出土土器外



8 珠洲



9 土師器皿・砥石・土製品・鉄

10 SK-13出土土師器皿
(1/2)11 SK-24出土土師器皿
(1/2)

68~77 古銭(2/3)

富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書 III

平成10年3月発行

編集・発行 富山県埋蔵文化財センター

〒930-0115 富山市茶屋町206番地3号

TEL 0764-34-2814

FAX 0764-34-2859

印 刷 所 中村印刷工業㈱

※本書は長期保存を考慮して中性紙を使用しています。